

These days, all text is digital. Whether writing an email or publishing a new edition of *The Tale of Genji*, the text will always start its life on a computer. However, while an e-book, for example, is 'digital', it can still be printed out and read. Electronic literature, on the other hand, cannot be printed. With electronic literature, text can move, be rearranged, projected onto walls, played as a video game, and more.

I not only study electronic literature, but I also create it. I have used computer code, 3D-printers, robots, data, and VR to create digital poetry. I take problems or concepts from print literature and try to extend those ideas in digital spaces. For example, *The Sound and the Fury* (1929) by William Faulkner is an experimental novel that depicts the stream-of-consciousness of its characters. This means text jumps all over the place and is often out of order. It is therefore a very difficult book to read. In his notes, Faulkner expressed a desire to publish his novel using coloured text to help the reader, but he was limited by the technology of his time. I took Faulkner's complaint as a challenge. I wrote a novel using a similar 'stream-of-consciousness' style. I then coded and coloured the text. Readers can use a key to follow the story. They can also put the text in chronological order or rearrange it completely.

This creative project allows us not only to explore new digital reading/writing processes, but it also allows us to use these processes to appreciate older texts. Through a combination of literary study and creative writing, we can produce new creative works. In turn, these creative works enable us to return to older works and reassess, reimagine, and remix them using contemporary digital insights.

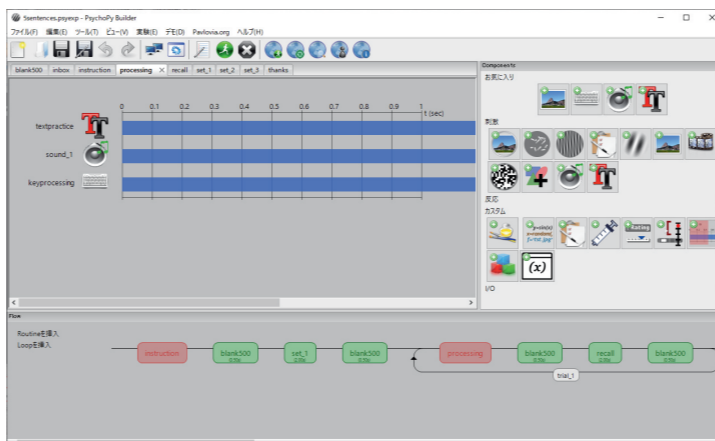
David Thomas Henry Wright (Associate Professor)

Little Emperor Syndrome (2018), a digital novel by David Thomas Henry Wright.



「英語教育学」と聞くと、皆さんはどのような学問を想像しますか。おそらく、英語の教え方について研究する学問だと想像される方が多いでしょう。それも間違いではありませんが、名古屋大学人文学研究科では、学習者が英語を習得する過程や第二言語の処理メカニズムを、データに基づいて科学的に検証しています。英語教育学分野に所属する教員および大学院生は、それぞれが解明したい言語習得現象をテーマに持っており、その現象を説明するための理論やモデルを構築するために実証的な研究を行っています。例えば、同じ期間英語を学んできた人でも、与えられたトピックについて英語でスラスラ話せる人とそうでない人がいます。その違いを説明するいくつかの要因を、理論的根拠に基づいた仮説としてあげていき、「それらの要因は英語発話の流暢さとは関係がない」という帰無仮説を立て、その帰無仮説がデータから反証できるかどうかを確かめます。これを確かめるには、まず母集団となる英語学習者からランダムに被験者をサンプリングし、何らかの英語産出タスクを行わせて発話データを収集します。データ収集には目的に応じて様々な方法がありますが、大学院生の多くは、PsychoPy や HSP といったプログラムを用いて、反応速度の計測を伴ったデータ収集を行っています。「英語教育学分野で、まさかプログラミングや統計学をマスターすることになるとは思わなかった」という感想は、本分野の修士の学生からよく聞かれる声です。皆さんも是非、名古屋大学人文学研究科で、データサイエンスとしての英語教育学と一緒に学びませんか。

村尾玲美 准教授



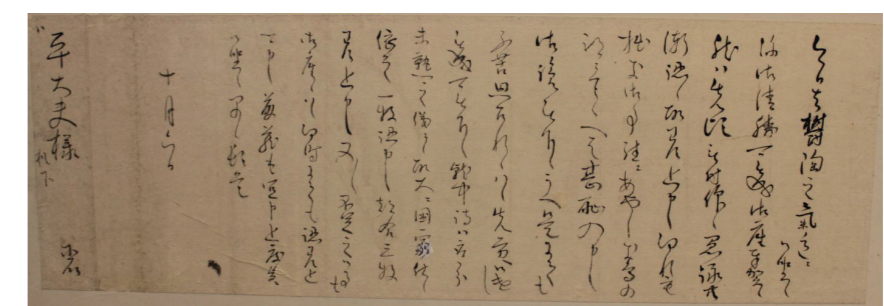
荒木田麗女は江戸時代中期の伊勢の文学者です。麗女は平安文学を研究し、歴史物語、擬古物語、紀行文、随筆、和歌、連歌、漢詩など、膨大な著作を残しています。伊勢には、土産を持って各地の檀家を回り、檀家が伊勢参宮に来た際には家に宿泊させてもてなし、案内をする御師がいました。麗女はそんな御師の家に生まれ育ち、御師の夫に支えられながら文化活動を行っていました。麗女はどのような人物だったのでしょうか。

麗女の手紙を見ると、日常が垣間見られます。もらった食べ物から、和歌や漢詩、連歌会などの文事まで、話題は様々であり、麗女の文人意識や交友関係もうかがえます。麗女の手紙の特徴は、相手により文体が異なることです。甥に宛てた手紙が多く残っていますが、まるで男性の手紙であるかのような書き方が見られます。男女関係なく文学談議をし、文化活動に執着した、麗女の自負心が表れているのでしょうか。一方、甥の奥さん宛の手紙では、女房詞を用い、「まいらせ候」と綴るなど、女性らしい手紙となっています。麗女は相手のことを思い、相手に合わせた文体で手紙を書いていたとも考えられます。手紙から麗女の性格も浮かび上がってくるのではないのでしょうか。宛先の人以外に読まれることを想定して書かれていない手紙を読み解くのは難解ですが、そんな私的なものだからこそ、物語などからはわからない発見もあるのです。手紙を読むと、一気に麗女が身近な存在に感じられます。麗女は、200年以上の時を超え、他人に手紙を読まれるとは思ってもおらず、恥ずかしがっているかもしれませんが。

このように手紙を読むことを楽しみ、手紙によって解明していくことも日本文学の研究の一つです。

石谷佳穂 博士後期課程1年

石水博物館所蔵荒木田麗女書簡



月刊名大文学部 第121号

隔月刊行



編集発行：
名古屋大学文学部広報体制委員会
koho@hum.nagoya-u.ac.jp
寄稿者の所属と学年は寄稿時点のものです。